

美術の窓(171)

11月29日の大阪中之島美術館

大和文華館館長 浅野秀剛

このところ、広重のことがばかり書いているので、今回は、大阪中之島美術館訪問記といきたい。訪れたのは、2024年11月29日、金曜日の午後である。最初に見たのは「塩田千春 つながる私(アイ)」。

かなり混んでいた。次が「開館3周年記念特別展 TRIO パリ・東京・大阪 モダンアート・コレクション」。「塩田千春」展よりは立っている。大阪中之島美術館、パリ市立近代美術館、東京国立近代美術館のコレクションから、「共通点のある作品でトリオ(3点1組)をつくり、構成するという、これまでになくユニークな展示により、コレクションの新たな魅力を浮かび上がらせませす。思いがけない作品の組み合わせによる新鮮な化学反応をお楽しみいただき、お気に入りの作品を見つけていただければ幸いです。」という主催者メッセージの展覧会である。担当のキュレーターがずいぶん苦労したということは伝わってきたが、私にとっては3館の名品展で、各館のコレクションの特徴は何となく把握できたが、それ以下でもそれ以上でもなかった。

もうすぐ終わりというタイミングで、「自己と他者」という括りの3本の映像作品があった。最初に見たのは、百瀬文《Social Dance》(2019、大阪中之島美術館蔵)である。聴覚障害者の女性とその恋人であろう健常者の男性のやりとり。女性がベッドに服を着たまま寝ていて(顔は見えない)、男性を呼び出し、思い出した旅行先での不満を手話で語る。男性はそれに応じ、懸命になだめる。自己を否定(抑圧)された女性の不満は治まらない。そんなやりとりである。

次に見たのは、出光真子《主婦の一日》(1977、東京国立近代美術館蔵)。

朝起きて、顔を洗い、食事、食器洗い、洗濯、電話での会話、買い物などをしてテレビを見て就寝、という一日を、白黒のモニターに映し出された「目」が見続けている。そんな内容である。

そして、ジュリアン・ディスキリ《Marathon Life》(2005、パリ市立近代美術館蔵)。夜に街をマラソンする男性。走りながら語るのは自身の一生である。生まれ、育ち、学校に行き、女性とつきあい、勤め、結婚し、子供が生まれ、離婚し、老いて終ろうとする自身の一生を走りながら語る。

私には、どの作品もその良さが分からなかった。それぞれ何を伝えたいかはある程度理解できる(と思う)。難しく解釈に困るという作品ではない(と思う)。しかし、だから何なのという気持ちである。映像作品にしなればいけない必然性や、その面白さ(魅力)、強さ(《Social Dance》には強さはあった)が感じられないのである。



図1

展覧会場で映像作品を3本も見たのは初めてであった。私は映像作品をほとんど見ない。それは歩留まりが悪いからで、時間がかかる割には、見た後、よかったと思える作品に出会うことが少ないからである。私は、いわゆる現代美術を見るのは嫌いではない。ただ、いいね、凄いな、と思える作品に出会うことは百に一つくらいかもしれない。昔、そのことを友人に話したら、そんなものだよ、それでいいんです、と言われ、それから心が楽になった。

「TRIO」展を出て帰ろうとしたら、2階多目的スペースで、無料の小松千倫「Osaka Directory 7」が開催されていた。小林は音楽家、美術家、DJと幅広く活動するアーティストだそうだ。照明が当たり音が流れるスペースに人が寝そべっている(靴を脱いで自由に横になれるらしい)。古着が吊るされ、それは販売もしているらしい。作品らしきものも置かれている。そういった空間で構成されている。私にとって、見たことのない空間(展示)であった。そういう意味では新しいコンセプトの作品であった。しかし、何これ、何が面白いの?、という気分である。私は、十分歳を取ったのかもしれない。

作品を評価する場合、当然ながら、何らかの新鮮さに注目することになる。コンセプト(思想、アイデア、行為、イメージと置き換えてもいい)が新しいか、表現が新鮮であるか、そして、制作されたもの

が魅力的か、が重要になる。その三者が揃えば完璧とっていい。現代の美術作家の多くは、自身の作品の新しさを懸命に訴える。だから、見る方もそれを分かなければいけないという気分になる。そして、疲れる。現代美術を見るのは嫌い、という人の過半はそういう人だと思ふ。

その日、大阪中之島美術館に行ったのは、「塩田千春」展を見るのが主目的であった。だが、そこに、昔見た塩田の作品が訴えてきた切迫感を感じられなかった。

コロナ禍で一時途絶えていたが復活し、2024年からビエンナーレとなった「学園前アートフェスタ」は、既に終了している。2024年の「学園前アートフェスタ」の会場の一つ、Kitchen-Lab.KACOMで展示した大東真也の作品は、ガラス製品を熱で変形したものであった。大東がしばしば試みているのが、上部(首の部分)を引っ張って伸ばし作品化するというもので、《魂の行方》(2017、図1)もそういったものの一つ。大東の創作手法はおそらく新しい。

過去の「学園前アートフェスタ」で、思い出に残っているのは、奥田誠一《earth revolution》(2019、図2)である。地面の一部を切り取って、変形し傾けて再配置したもので、私にとって、かなり衝撃的なインスタレーションであった。

現代美術も、時に、面白い。



図2